

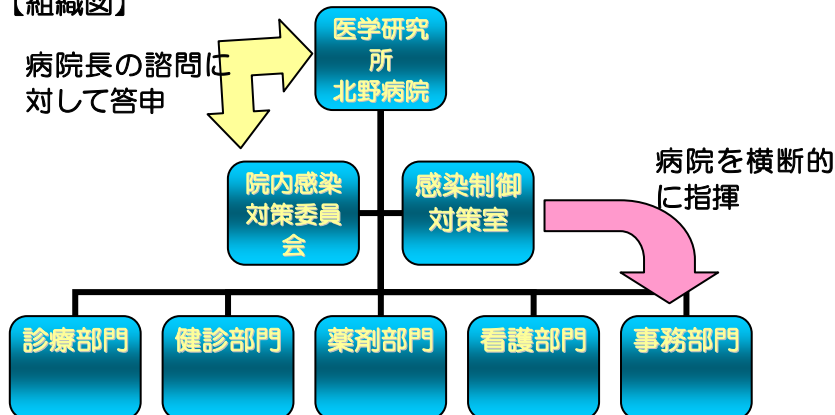
感染症科

A. 体制

1. 22年度の特徴

平成22年度は、院内感染対策全般について整備を行った。その内容として、組織体制の充実、各種感染対策マニュアルの改訂と整備、職員に対する標準予防策の徹底及び感染経路別予防策の啓発活動が挙げられる。病院の安全管理の面から重要な部門である院内感染対策は、昨年来同様、兼務の形で感染症科メンバーが精力的に活動を展開してきたが、その活動強化のために組織体制として、21年度に新たに病院を横断的に指揮する感染制御対策室が発足した。感染症科は診療部門の1科として、看護部、薬剤部、検査部とともに感染制御対策室における Infection Control Team の活動を支援するという体制をとっている(下図参照)。病棟ラウンドは引き続き、毎週木曜に行われ、看護師に対しては病棟での院内感染対策の実際を、医師に対しては感染症治療に対する consultation と指導を行い、より一層各病棟と医師に周知されてきた。以上のことから、北野病院の ICT 活動は、病院内に着実に浸透されつつある。

【組織図】



2. 感染症科(感染制御対策室)スタッフ

感染症科医師は、感染症科長から8月より感染症科部長兼、感染制御対策室室長兼、小児感染症部門部長の羽田敦子、引き続き、血液内科福永明子医師、総合内科松村拓朗医師の計3名の体制であった。

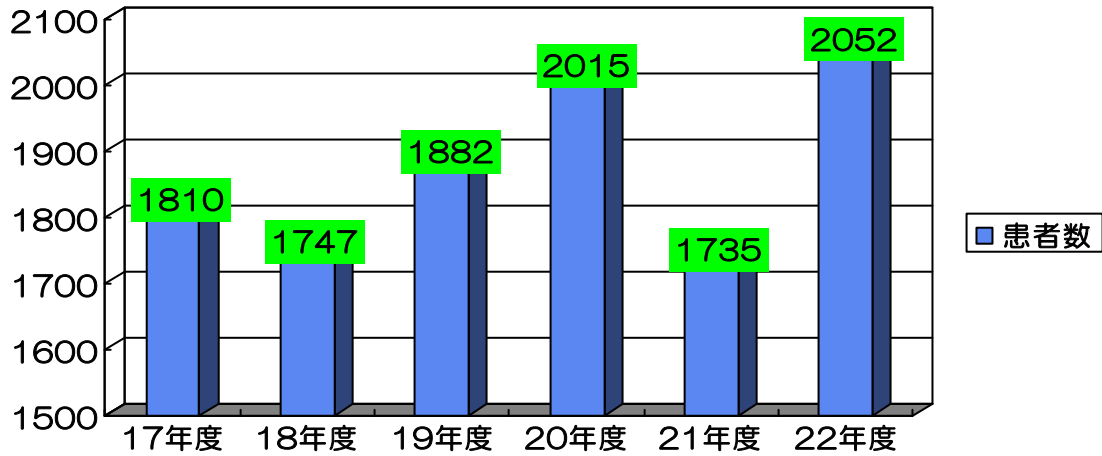
ICTとして、看護部からは3名、感染管理認定看護師杉元佐知子師長(専従)が統括、さらに看護部より柴原三枝子主任、岡崎佐知子師長、高木朱実師長、吉井輝子師長、高詰江美看護師、が感染対策専門看護師の任にあたった。臨床検査部門からは宇野将一臨床検査技師、薬剤部から三宅麻文薬剤師、事務部門から滝野美和子が感染症科の業務を行っている。以上計12名のスタッフが個々の部門と兼務で専門領域での役割を担い、病院の感染制御対策を横断的に指揮している。

B. 診療実績——臨床統計 等

1. 感染症患者ラウンド状況

検査部の協力を得て、主に管理抗菌薬使用患者及び血液培養陽性患者をリストアップし、平成16年1月より毎週木曜日に病棟ラウンドを行い、感染症治療の指導を行っている。平成17年度のラウンド延べ患者数は1,810名、平成18年度は1,747名、平成19年度は1,882名、平成20年度は2,015名、平成21年度は1,735名、平成22年度は2052名(図1参照)

図1 感染症患者ラウンド数



2. 院内感染発生データ (平成 22 年度)

1) CLA-BSI Surveillance

結果と共に現状の問題点及び改善に向けた提案事項をまとめ、現場へフィードバックした。

- ・ 22年度、全20例 (21年度31例、20年度28例) に菌血症が発生
- ・ 血流感染起因菌；CNS40%、S.aureus(MR含む)20%、Candida spp 35% ESBL 5% など (表1血流感染起因菌参照)
- ・ 22年度BSI発生までの挿入期間 (平成21年度)
- ・ 平均 16日 (21.6日)、最短6日 (6日)、最長69日 (85日) ポート挿入は除く

※ 最長装入期間については、ポートの挿入の為 (354日) 長期間となっています。

表1. 血流感染起因菌

表1. 血流感染起因菌

2008 年度		2009 年度		2010 年度	
菌名	件数	菌名	件数	菌名	件数
Candida spp.	10	S.epidermidis (MR)	10	Candida spp.	7
S.epidermidis (MR)	6	黄色ブドウ球菌 (MRSA 含む)	9	S.epidermidis (MR)	8
黄色ブドウ球菌 (MRSA 含む)	4	Candida spp.	4	黄色ブドウ球菌 (MRSA 含む)	2
腸球菌 (E.faecalis 他)	4	P.aeruginosa	3	Escherichia coli (ESBL)	1
その他	4	その他	5	その他	2

表 2. 挿入部位
と発生部門

	挿入部位		診療科		病棟	
	件数	件数	件数	件数	件数	件数
1	内頸	16	消化器外科	6(1)(2)	7E	2(1)(2)
2	鎖骨下	5	消化器内科	2(1)	8W	1(2)
3	大腿	1	腎臓内科	2(1)	10E	2(1)
4	鼠径部	2	血液内科	6(1)(2)	10W	5(1)
5			神経内科	4(1)(3) (4)	11E	5(1)(2)
6			泌尿器科	1(1)	11W	5(1)(2)
7			心臓センター	1(1)	13E	3(3)(4)
8			小児科	1(2)	14E	1(4)
9			産婦人科	1(2)		

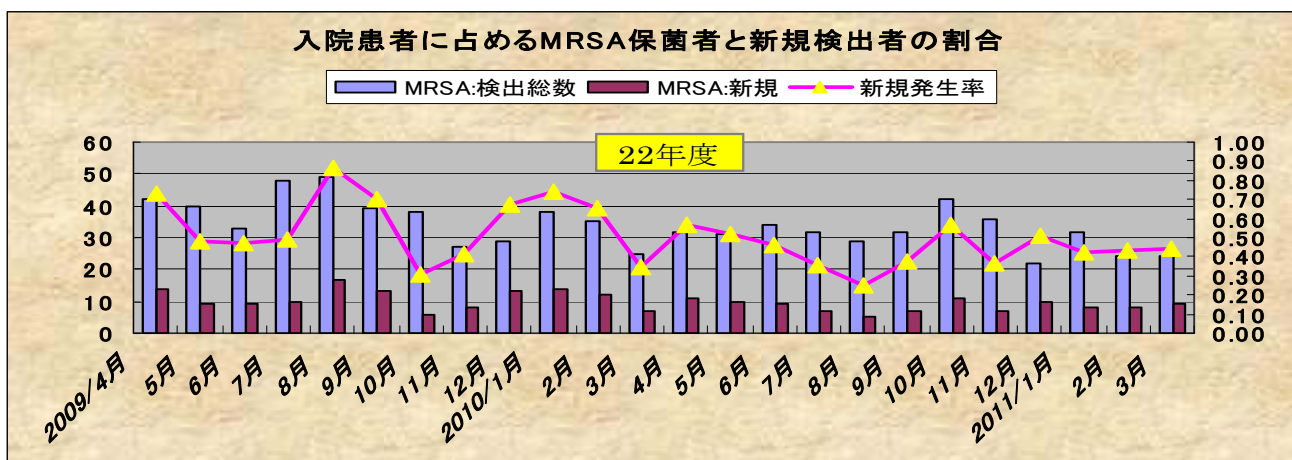
2) 耐性菌 Surveillance

薬剤耐性菌及び監視微生物(セラチア・セパシア)の検出状況を判定基準に従い判定し、細菌検査室からの報告をもとにデータをまとめフィードバックした。必要時現場介入を行い、接触感染対策の強化を図った。

22年度新規検出率は0.44%(21年度0.51%)で、前年度より減少傾向。

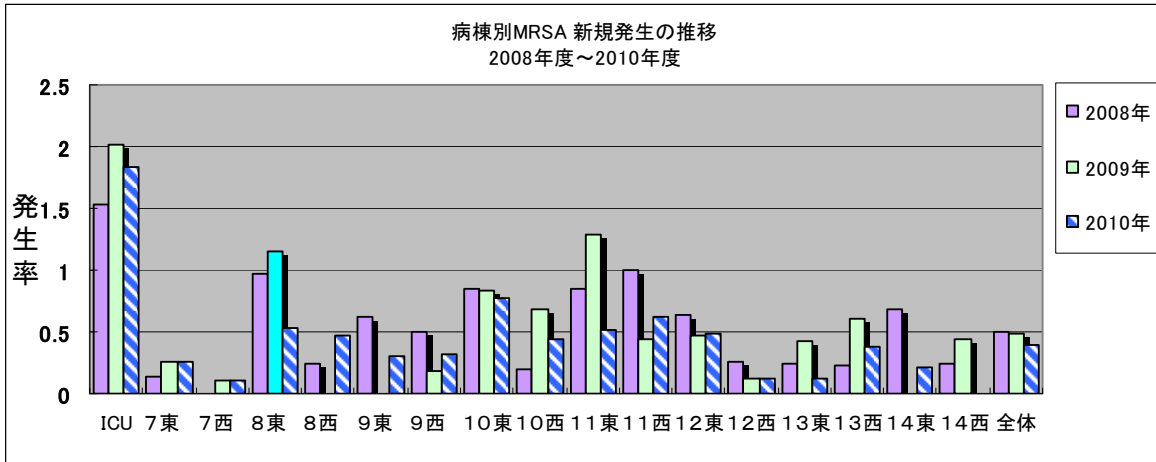
22年度耐性菌検出状況(月別)、耐性菌新規検出率(部署別)は以下の通りであった。(図2、3参照)

図 2. 入院患者に占める MRSA 保菌者と新規検出患者の割合
H20 年 4 月～22 年 3 月



MRSA 新規発生率 = 新規検出患者数 / 延べ入院患者数 × 1000

図 3. MRSA 病棟別新規検出推移



3) 針刺し・切創 EPInet 集計結果 (図 4-6)

- ・ H22 (2010) 年度の針刺し・切創発生件数は69件 (2008年度78件/2009年度66件)であった。
- ・ 職種別発生件数では、医師 (SR・研修医含む) 32件、看護師29件であった。(図4)
- ・ 発生場所は、病室での発生が多く37%、次いで手術部17%であった。(図5)
- ・ 発生状況については、患者への使用後の抜去時の事故が最も多く、次いでリキップ時・リキップ後の針廃棄時の発生が多かった。(図6)

図 4. 職種別発生件数

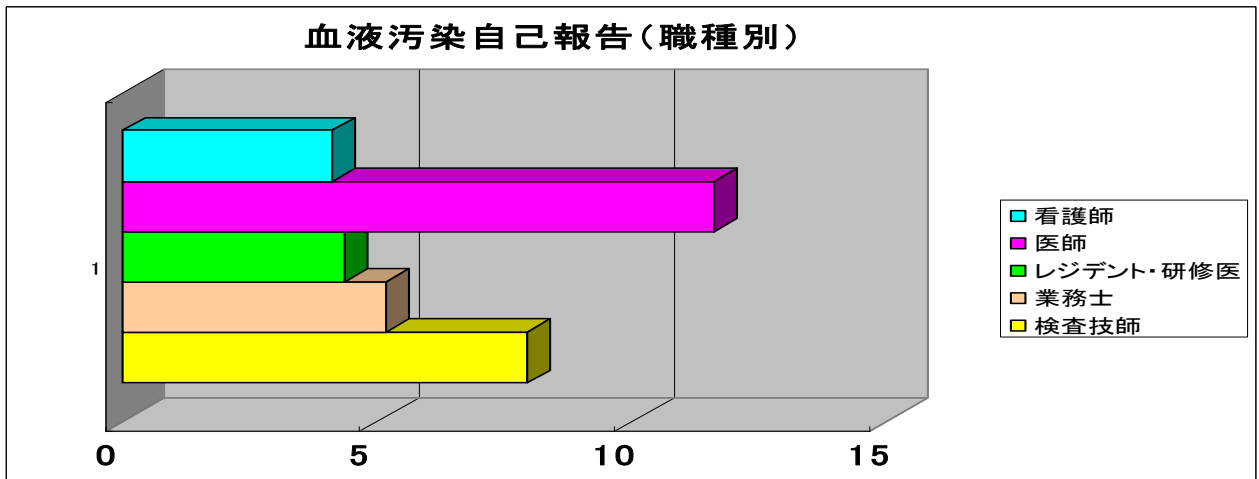


図 5. 針刺し・切創発生状況：発生場所

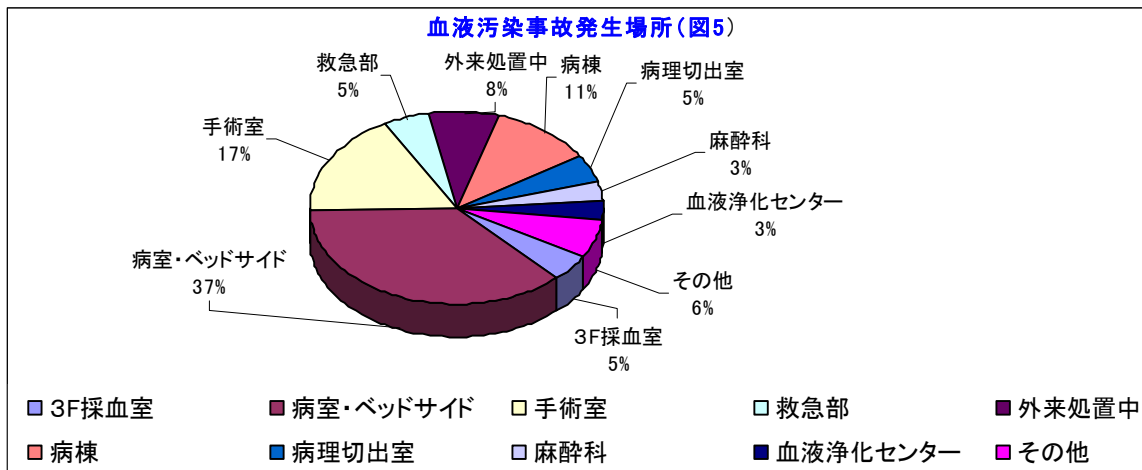
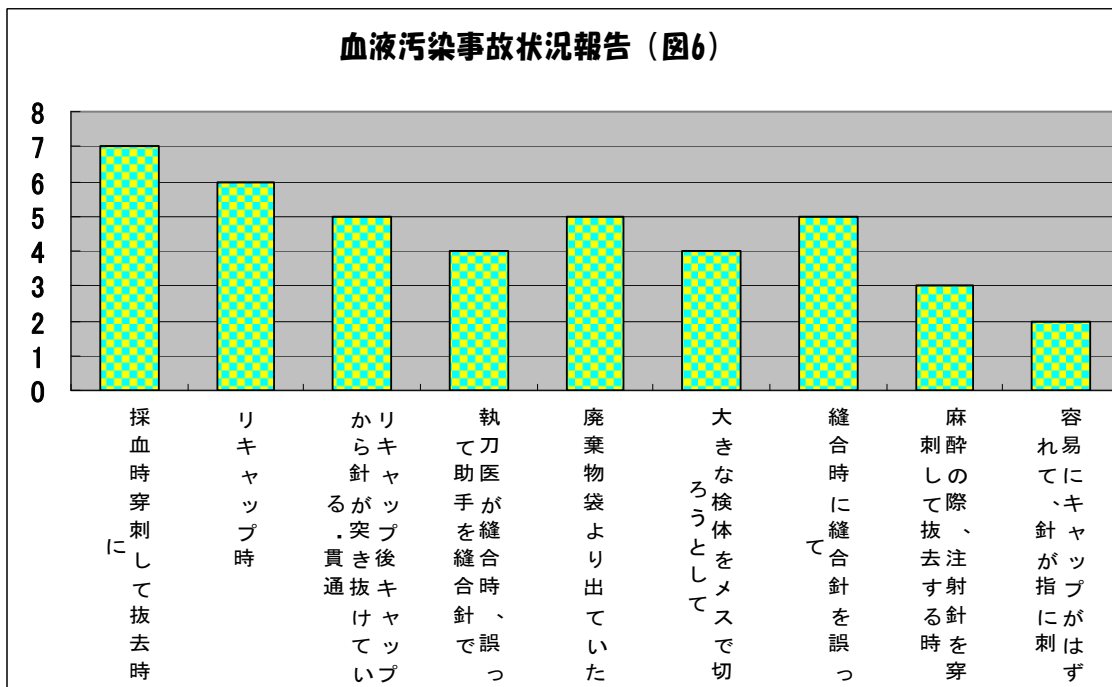


図 6. 針刺し・切創発生状況



3. 感染管理教育の実施 (表 4、5 参照)

- 1) 新人職員対象の講義
- 2) 全職員を対象とした感染症セミナー開催
- 3) 部門別勉強会の実施

4. 感染対策について

- ・マニュアルの改訂と見直しを行い、病院キャビネットに収載した。
 - 1) 結核(結核疑いを含む)新規診断時取り扱い手順について；マニュアル・フローチャート見直しと改訂
 - 2) 標準予防策
 - 3) 感染経路別予防策

C. 研究実績——論文・学会発表のテーマ・発表者

《論文》

皮下感染から化膿性髄膜炎を併発した後頭部先天性皮膚洞の1例

南方俊祐、羽田敦子、中川権史、西田仁、多久和麻由子、森嶋達也、熊倉啓、吉岡孝和、塩田光隆、秦大資

日本小児科学会雑誌. 114 巻 5 号 869-872 頁 2010 年

《学会発表》

2010 年 4 月 5 日 (月) ～ 2010 年 4 月 6 日 (火)

第 84 回日本感染症学会・総会・学術集会 (京都国際会館)

新型インフルエンザ対策としての S-OIV ワクチン接種について

羽田敦子

1) 田附興風会医学研究所北野病院 感染症科、

2010 年 6 月 3 日 (木)

【第 2 回近畿ヘルペス感染症研究会学術講演会】 ANA クライムプラザホテル大阪 (旧大阪全日空ホテル)
水痘・帯状疱疹とワクチン ～水痘ワクチンをどう使う～

羽田敦子

田附興風会医学研究所北野病院 感染症科、

2010 年 11 月 27 日 (土) ～ 2010 年 11 月 28 日 (日)

第 42 回日本小児感染症学会総会・学術集会 (仙台国際センター)

保育施設における積極的水痘予防接種勧奨の経年的影響

羽田敦子1)、大日康史 2)

1) 田附興風会医学研究所北野病院 感染症科、2) 国立感染症研究所感染症情報センター

2010 年 12 月 11 日 (土) ～ 2010 年 12 月 12 日 (日)(東京：九段会館)

第 14 回日本ワクチン学会学術集会

小児科医師における新型インフルエンザワクチンの免疫応答

羽田敦子1)、高橋和郎 2)

1) 田附興風会医学研究所北野病院 小児科、2) 大阪府立公衆衛生研究所

http://www.secand.jp/abstractdata/2010/1211_wakuchin14/wakuchin14.pdf

D. 今後の課題

1. 標準予防策・接触感染防止対策の正しい理解と浸透
2. 効果的な職員教育の実施、定期的な講習会実施
3. 耐性菌対策 (ア) 発生を防止するための監視体制の強化 (イ) ICT ラウンドの充実
4. 病院内感染症発生を早期に察知するための監視体制の強化
5. 血液曝露事故件数の低減化
6. SSI サーベイランスの充実
7. 抗菌剤使用の適正化 (ア) ICT ラウンドを通じて、抗菌剤の適正使用についての相談・監視を継続 (イ) 感染症治療のコンサルテーションの充実をはかる。 (ウ) 治療マニュアル作成など
8. 定期的なマニュアル改訂
9. 院外発表 (学会発表、論文発表) などでの活動内容を発表
10. 研究活動 (単独研究及び院外施設との共同研究)

表4 「2010年度感染症科職員教育・講演会」

NO.	日時	場所	講演名	演題	所属	演者名	人数
1	2010/5/15	第1会議室	コアレクチャースーパーローター	抗菌薬の使い方	北野病院、小児科部長、感染症科科长	羽田 敦子	22
2	2010/5/18	きたのホール	血液等汚染事故に関する講演会	リスクマネジメント 針刺し事故の現状と対策	ジョンソン・エンド・ジョンソン(株) エチコン事業部マーケティング部	戸上 浩昭	97
				当院の針刺し・切創の実態報告(2009年度針刺しサーベイランス結果より)	北野病院、専任衛生管理師、師長	高木 朱実	
3	2010/10/29	きたのホール	感染症科セミナー	薬剤耐性菌への対応	北野病院、小児科部長、感染症科科长	羽田 敦子	104
				長期入院患者における肺結核発症について	北野病院、呼吸器内科部長	福井 基成	
4	2011/3/29	第1会議室	スーパーローターオリエンテーション	標準予防策、PPEの着脱・手洗い演習	看護部感染対策担当	岡崎・高詔	18
5	2011/3/31	第1会議室	スーパーローターオリエンテーション	感染管理	北野病院、小児科部長、感染症科科长	羽田 敦子	18

表5 2010年度 講演会実施状況

NO.	日時	場所	講演名	演題	所属	演者名	人数
1	2011/1/14	きたのホール	第8回北大阪感染症研究会	重症筋無力症、多発性硬化症の経過中に肺炎を合併し治療に難渋した一例	北野病院、呼吸器内科	高松 和史	105
				全身性血管治療炎治療に結核を発症した透析患者の一例	北野病院、腎臓内科	米倉 由利子	
				リアルに考える院内感染対策	神戸大学医学部付属病院 感染症内科 教授	岩田健太郎	
2	2011/3/18	きたのホール	コアレクチャー	SSI(Surgical site infection 手術部位感染症)について	山形大学医学部付属病院、検査部部長、准教授、感染制御部部長	森兼 啓太	74